

2026年度 神戸大学 第2問 [問題編]

「神戸大古文のみかた」の回となりました。

2026年の神戸大国語の第2問を取り上げ、問題解説ならびに、神戸大学を志望する上でどのような力が必要かということも説明していきます。

【二】 次の文章は、中国の逸話集を翻案した物語の一部である。これを読んで、問一と五に答えなさい(設問の都合で本文を改変した部分がある)。(配点四〇点)

昔、徳といふ人、陳氏と聞こゆる女にあひ具したりけり。かたちいとかしげにて、心ばへなど思ふさまなりければ、互ひにあさからず思ひかはして年月を経るに、思ひの外に世の中乱れて、ありとある人高きも卑しきも、さながら山林に隠れまどひ **a**。さがたき親兄弟も四方にたち別れて、おのがさまさま逃げさまよへる中に、この人別れを惜しむ心誰にもすぐれたりければ、人知れずもろともあひ契りけり。我も人もいづかたとなく失せなん後、**①**おのづから世の中静まりて、またもあひ見ることありなんものを、その程の有様をばいかでか互ひに知るべきと聞こえさするに、女の年ごろ持ちたりける鏡を中より切りて、おのおのそのかたがたを取りて、月の十五日ごとに市にいだして、この鏡の半ばを尋ねさするものならば、必ずあひ見て互ひにその有様を知るべしと言ひつつ、いとううち泣きて別れ去りぬ。その後、この夫恋しさわりなくおぼえて、いたづらに月日を過ぐすまに、いかなる人に心をうつして契りしことを忘れ **b**らんと、**②**胸の苦しさ抑へがたくぞおぼえける。

ます鏡われて契りしそのかみの影はいづちかうつりはて **c**し

かやうに思ひやりけるにしも、色かたちのなまめかしくはなやかなるにやめで給ひけん、時の親王にておはしける人に、限りなく思ひかしづかれて年月を経るに、**③**ありしには似るべくもなき有様なれど、この鏡のかたがたを市にいだしつつ、昔の契りをのみ心にかけて、世の常は下燃えにてのみ過ぐしけるに、鏡のわれ持ちたる人として尋ねあひて、男女の有様互ひにおぼつかならず知りかはしつ。女これを聞きけるより、おぼえずなやましき心地うち添ひて、**④**うつし心ならぬけしきを見とがめて、親王あやしみ問ひ給ふを、さすがにおぼえて、しばしば言ひ紛らはしけれど、しひて宜はすれば、わびしなからありのままに聞こえさせつ。親王これを聞き給ふに、御袖もしぼりあへず、あはれにのみじくおぼされけるにや、**⑤**よそほひいかめしきさまにいだしたてて、昔の男の下へ送りつかはしたるに、徳言限りなくうれしきにつけても、まづ涙ぞさきだちける。

契りおきし心にくまやなかりけんふたたびすみぬ中川の水

いやしからぬ有様をふり捨てて昔の契りを忘れざりけん人よりも、**⑥**親王の御情けは、なほたぐひあらじや。

【注】○徳言——徐徳言。古代中国で、ある国の王族に仕えていた男性。

〔唐物語〕より

○ます鏡——よく澄んだ鏡。

問一 傍線部①～④を、それぞれ分かりやすく現代語訳しなさい。

問二 傍線部(A)とあるが、誰がどのようなことに「胸の苦しさ」を感じたのか。五〇字以内で説明しなさい。

問三 傍線部(B)の内容とそれに対する作者の評価を、六〇字以内で説明しなさい。

問四 空所a～cには、助動詞「ぬ」の活用形が入る。それぞれ適切な活用形に直して答えなさい。

問五 『唐物語』は、平安時代から鎌倉時代頃に成立した作品だと考えられている。次の中からこの時代の作品でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

イ『伊勢物語』 ロ『雨月物語』 ハ『源氏物語』 ニ『竹取物語』 ホ『大和物語』

※本問題は2026年度の神戸大学前期試験の古文の問題をそのまま掲載しております。

2026年度 神戸大学 第2問 [解答・解説編]

【解答】

問一

- ① 自然と世の中が穏やかになって、あなたと私が再会することがきつとあるだろうが
- ② 女「陳氏」は、徳言の妻だった以前とは似るはずのないほど裕福な様子であるが
- ③ 正気ではない女「陳氏」の様子を、親王は見とがめて
- ④ 親王は、装束を盛大で壮麗な感じで女「陳氏」を送り出して

問二 徳言は、女「陳氏」が他の人を愛して自分との再会の約束を忘れている可能性があることに、胸の苦しさを感じた。(49字)

問三 寵愛した女が先夫を愛し続けていることに感動して、女を先夫の許に返した親王の慈悲深さは、比類無い程素晴らしいという評価。(59字)

問四 a め b め c に

問五 口

【解説】

問一

傍線部を現代語訳していく問題。まず品詞分解を行い、文法事項や単語をあてはめ、直訳を作成する。次に「分かりやすく」という設問条件に則って、主体客体の省略などを適宜補って解答する。

傍線部①について、直訳のポイントは「おのづから」「なん」「ものを」。「おのづから」には「自然に」「いつの間にか」「偶然に」「(下)に仮定表現を伴って」もしも」などの訳があるが、今回は文脈上「自然に」で訳す。「なん」は連用形接続をしているため、強意の助動詞「ぬ」の未然形＋推量の助動詞「む」の連体形。接続助詞「ものを」は、逆接確定条件や順接確定条件の訳があるが、今回は文脈上、逆接確定条件で「けれども」等の訳にする。傍線部を直訳すると、「自然と世の中が穏やかになって、再会することがきつとあるだろうが、」となる。次に、「分かりやすく」言葉を補うのだが、今回は「再会」する二人の存在を「あなたと私」「私たち」のように明記しておけばよいだろう。

傍線部②について、直訳のポイントは「なれど」。「なれ」は体言接続なので、断定の助動詞「なり」の已然形。「ど」は逆接確定条件の接続助詞なので、「けれども」等で訳す。傍線部を直訳すると、「以前とは、似るはずのない様子であるが、」となる。次に、「分かりやすく」言葉を補うのだが、今回は「以前とは似るはずのない様子」とあるので、主体を明記した上で、「以前」と「現在」の様子をそれぞれ書くことよいだろう。傍線部は、親王の寵愛を受けた人物なので、陳氏(以降「女」と表記)が主体となる。以前は徳言の妻、現在は親王に寵愛を受け、裕福である、という状態であることを踏まえて解答する。

傍線部③について、直訳のポイントは「うつし心」「ならぬ」「けしき」。「うつし心」は「現し心」と書き、「正気」等と訳す。「ならぬ」の「なら」は体言接続なので、断定の助動詞「なり」の未然形。続く「ぬ」は未然形接続なので、打消の助動詞「ず」の連体形。「けしき」は「様子」「兆候」「機嫌」「意向」等多義語だが、今回は文脈上「様子」で訳す。傍線部を直訳すると、「正気ではない様子を見とが

めて」となる。次に、「分かりやすく」言葉を補うのだが、今回は正気ではない人物、それを見て怪しんだ人物を、それぞれ補うとよいだろう。

傍線部④について、直訳のポイントは「いかめしき」「いかめし」には、「威厳がある」「盛大だ」「激しい。恐ろしい」といった訳があるが、今回は文脈上、「盛大だ」と訳す。傍線部を直訳すると、「装束を盛大に整え出発させて」となる。次に、「分かりやすく」言葉を補うのだが、今回はまず、誰の装束を誰が整え出発させたのか、という主体をそれぞれ補う。すると、「親王は、装束を盛大に整え女を出発させて」となる。ただしこのままだと、やや稚拙な文章なので、自然な現代日本語となるように整える。この「盛大に」とは装束の状態を指すので、「壮麗な感じに」と言葉を補った。なお、ここである「装束」とは女本人はもちろんのこと、その従者や牛車等も含まれるであろうから、女の服装に限定しない方が望ましい。

問二

まず設問条件を確認する。「誰がどのようなことに『胸の苦しさ』を感じたのか」と問われているので、「は（が）」なことに『胸の苦しさ』を感じた」という解答の型を作成する。あとは、空欄補充の要領で、解答の核となる要素を本文中から探す。

傍線部の直前に引用の格助詞「と」があるので、その直前、つまり「その後くらん」までに注目する。少々言葉を補うと、次のような現代語となる。「その後、この夫（＝徳言）は（女への）恋しさが甚だしく感じて、無意味に月日を過ごすにつれて、『（女は）どのような人に心変わりをして（私と）約束したことを忘れているだろう』と」。

次に、「約束」の内容に着目する。女と徳言の約束になるので、解答の核は「再会」となる。なお、鏡の件も解答に入れるべきか迷う人もいるかもしれないが、字数がかなり限られているので、優先順位は低いだろう。

以上から、先程の解答の型にはめると「徳言は、女が浮気をして自分との再会の約束を忘れていた可能性があることに胸の苦しさを感じた。」となる。

問三

まずは設問条件を確認すると、①傍線部Bの内容、②それに対する作者の評価、この二点を問われていることが分かる。解答すべき項目が複数ある場合は、それぞれの答案を作成した上で、最後につなぎ合わせる、といった解答方法が、答え忘れによる減点を防ぐという面で安全である。

では、①について。「親王の御情け」とあるので、親王がかけた慈悲の内容を、これより前から探す。該当箇所は「親王これを聞き送りつかはしたるに」あたり。親王は、正気を失った様子の女にその理由を尋ねると、昔の夫（徳言）のことを愛し続けているという。親王はそれを聞き、涙を流し心を動かされ、女の装束を飾り立てて徳言のもとに送り出してやるのである。

次に②について。傍線部の直後にある「なはたぐひあらじや（やはり比類ないのではなからうか）」を参照する。この「比類ない」とは、親王の慈悲についての評価なので、褒め言葉として捉えるべきで、「比類ないほど素晴らしい」などと言葉を付け加えるとよい。

最後に①と②を、自然な現代日本語となるようにつなぎ合わせる。問二・問三共に字数制限が設けられており、簡潔にまとめる力が求められている。記述答案作成の練習をするときは、まず字数制限を気

にせず下書きをしてみて、その後、字数制限に沿って内容を削ったり足したりするのがお勧めである。

問四

完了・強意の助動詞の「ぬ」の活用は、「な／にぬ／ぬる／ぬれ／ね」となる。

空欄 a は、文末にあり、特に係り結びなど見られないことから、終止形の「ぬ」となる。

空欄 b は、終止形接続をする現在推量の助動詞「らん（らむ）」に続くので、「ぬ」は終止形にする。

空欄 c は、連用形接続をする過去の助動詞「き」に続くので、「ぬ」は連用形にする。

近年神戸大学は、文法の問題を出題している。基本的な内容であるため、確実に正解したい。

問五

『雨月物語』は江戸時代に成立した上田秋成の作品。その他の選択肢は全て平安時代に成立した作品。基本的な文学史の知識問題が、この年も出題された。暗記をする以外に対策法は無いので、神戸大学を目指す皆さんは、作品の成立年代・作者（判明している場合）・ジャンル、この三点を中心に、古文の文学史の範囲は必ず確認しておこう。